

両親の不和が子の心理的発達に及ぼす影響 —青年女子の場合—

その2. 不和状態が作り出す、親子関係

萩原英敏

(2004年9月26日受理)

要約

不和状態の親に対して、子どもの目から見て、どのような親子関係を築いているかを明らかにする為、某女子大学生141名を対象として、「家庭環境の内容」「両親の争いの時の対処の仕方」を尋ねる26項目からなるアンケート調査、親子関係を調べるFDTを実施した。その結果、次の様な事が明らかになった。

1. 両親の不和など家庭内の対立が多く、不仲な関係が続くと、子どもは対母親、対父親両方共通して、「自分を情緒的に受容する事もなく、信頼もせず、拒絶するのみである。そして両親の考えも一致せずお互い不満が多い。それなら自分も両親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考える様な、親子関係を築いている。
2. この様な親子関係を築いている子どもは、両親の不仲な時の対処として、内面的に思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こす者に多く見られた。
3. 両親の不仲な時の対処の仕方、対父親は、対母親に比べて、特徴ある親子関係は築いていなかった。
4. 以上の事から、両親の不和の時、対処の仕方が、内面的思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こす子どもは、親に対して、安全基地の役割を期待するような、親子関係を築けていない事が明らかになった。しかも父親より母親に対して、この特徴が明確に示された。

キーワード 両親の不和、青年女子、内面的思いや感じ、巻きぞえ的行動、FDT

I. はじめに

今日の青年女子が、以前に比べて心理的問題を持っているのは、子どもの時から、親などから受容されず、自分自身を受け入れられない「自己否定」の状態になっているという仮説から、本来受容すべき親が、子どもの支えとしての「安全基地」の役割を取っていない現状があるのではないかとこの事を明らかにする為、前回の研究¹⁾で、両親の不和の状態、それへの介入の仕方、影響としての適応の仕方などを調べた。

その結果、(1) 両親の不和を多く経験した者は、青年期になっても、対人関係の困難性を中心とした内向性問題（不安、痛み、不登校、神経性食欲不振症など）を抱え、また他者への不信感、自己への信頼感の無さを感じている。(2) 両親が不和な時の介入の仕方では、内面的思いや感じで困惑したり、巻きぞえ的行動を起こしたり、また回避行動をやった場合は、青年期になっても、対人関係で多くの困難性を抱えるなどの内向性問題を持っていたり、他者への不信感、自己への信頼感の無さを感じている。(3) 一方、両親が不和な状態であっても、楽観的なとらえが出来た者は、適応の問題は生じていない。などが明らかになった。

以上の結果は、両親の不和は、その介入の仕方にもよるが、青年期になっても適応の問題に影響を及ぼすという事である。そして、この理由として、1) の考察で述べた様に、この不和状態は、本来受容すべき親が、子どもの支えとしての安全基地の役割を取っていない為ではないかと考えている。

そこで今回は、不和状態の親に対して、子どもの目から見て、どのような親子関係を築いていたのかを明らかにする。この事により、不和状態の親のどのような面が、子どもにとって安全基地としての役割として不足しているかを明らかにする事が出来る。

II. 方法

1. 対象者

某女子大生 141名

2. 調査（アンケートと診断検査）

A. 前回の研究¹⁾で用いた「人間形成に関わる家庭環境について」で、5段階評定のもの一（資料1）

B. FDT (Family Diagnostic Test) —親子関係診断検査²⁾

子ども用—対母親、対父親—（資料2）

このFDTは、Symonds, P. M.³⁾の考えに基づき、Schaefer, E. S.ら⁴⁾が作成した、従来の「支配—服従」「保護—拒否」といった2次元の組み合わせの親子関係診断テストではない。このテストは、子どもが「親から切り捨てられる不安を持っていないか」「親を安全の基地としているか」といった、きわめて親子間の情緒的側面をみたものであり、不和状態が作り出す、親子関係という本題の目的に沿った診断検査という事で採用した。

なおFDTの子ども用は、対象が小学生用と中・高校生用に分かれている。今回の対象者は大学生という事で、少し年少のものではあるが、過去の親子関係も含めて見ようとする事から、年齢的には近い、中・高校生用のものを用いた。

この子ども用FDTは、対母親、対父親それぞれに、8尺度による60の質問項目によって作られている。まず質問は、「あなたの気持ちに、もっともよく合っていると

思うもの」を選ばせるやり方で、回答は「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」まで5段階評定で、点数化してある。そして尺度別に素点を合計し、それをパーセンタイル値に換算するやり方を行っている。

次にこの8つの尺度であるが、以下の様な内容のものである。

尺度1 〈被拒絶感〉…10項目

この尺度は、子どもが「自分は両親から好かれてもいないし、認められてもいない」という気持ちを、どの程度もっているかを測定していて、この尺度のパーセンタイル値が高い場合、親から切り捨てられる不安を強くもっている可能性が高く、そのような不安をもたせる親に対する強い怒りの感情ももっていると考えられる。

尺度2 〈積極的回避〉…10項目

この尺度は、子どもの方から親との接触をあえて避け、関わりをできるだけもたないようになっている程度を測定するものである。親から否定的にみられる事に対して、「それならそれで結構だ。自分だって相手にしない」とつぶやいている状態を示しており、値が高い場合問題といえる。

尺度3 〈心理的侵入〉…5項目

この尺度は、親がどれほど自分の事に口をはさみ、自分のプライバシーを侵害していると子どもが感じているかを測定するものである。値が高いと、親は干渉的、支配的で自分の内部にドカドカと入ってくると思っている。一方値が低いのは、親は干渉的ではないが、子どもに対して何の関心も示さず、子どもにとっては無視されてると、とっている場合もある。

尺度4 〈厳しいしつけ〉…5項目

この尺度は、子どもが親のしつけを、どの程度厳しいものと認知しているかを測定するものである。値が高いと、被拒絶感など伴っていて問題も多い。一方値が低いと、心理的侵入と同様、子どもにとっては無視されていると、とっている場合もある。

尺度5 〈両親間不一致〉…5項目

この尺度は、養育に関する両親の考え方の不一致ばかりでなく、対母親では子どもが認知している「子どもの養育に関しての父親に対する母親の不満」、対父親では「父親の母親に対する不満」をどの程度子どもが認知しているかという側面もみている。その為両親が不和の場合、この値は高くなる事が予測される。

尺度6 〈達成要求〉…5項目

この尺度は、「よい成績をとりなさい」といった、常に親からプレッシャーをかけ

られたと、子どもが感じているかを測定するものである。この値が高いとプレッシャーをかけすぎで、被拒絶感を高める事にもなる。

尺度7 〈被受容感〉…10項目

この尺度は「親は自分を信頼して認めてくれているし、心から愛してくれていると、子どもがどの程度思っているか」を測定するもので、〈被拒否感〉と反対の尺度である。この値が高いと、親から信頼され、とても大切にされているという事で、親から切り捨てられる不安も無く、親を安全の基地としていると考えられる。

尺度8 〈感情的接近〉…10項目

この尺度は、「親を子どもがどの程度情緒的に受容しているか」を測定するものである。この値が高いと、子どもは親が好きで、親を信じていて、親との接触を高しみ、親を安全の基地にしていると考えられる事が出来る。

FDTは、以上の8つの尺度別に素点をパーセンタイル値に換算し、大体上は80パーセンタイル以上、下は20パーセンタイル以下が危険域であるとしているので、本研究では、パーセンタイル値を20点刻みで段階づけた。すなわち0～20点…1段階、21～40点…2段階、41～60点…3段階、61～80点…4段階、81～100点…5段階とした。

3. 調査時期

2003年1月～4月

4. 分析方法

SPSSによる単純集計及び多変量分析法

III. 結果と考察

1. FDTの尺度別段階値

[A] 対母親…(表1)

尺度1 〈被拒絶感〉は、段階値1、2の者が82.3%を占め、大部分の者は、自分は母親から拒絶されているとは思っていない。しかし7.1%の者が段階値5で、母親から拒絶されているという感じを持っている。

尺度2 〈積極的回避〉は、被拒絶感と大体同じ傾向を示しているが、少し段階値1、2の者が被拒絶感より少なく、77.3%となっている。一方段階値5の者が、10.6%で10人に1人の割合で、積極的回避傾向を示している。

尺度3 〈心理的侵入〉は、段階値2、3、4の中庸の値を示すのが、望ましいと考えられているが、この中庸の値を示すのは、全体で49.6%で約半数の者である。一方、可成心理的侵入をされていると思っている段階値5の者が14.2%いる。また、プライ

バシーを尊重しているのか、親が自分に対して何の関心を示さない為なのか、その値を示す段階値1を示す者が36.2%と3人に1人強いる。これが後者の、親が自分に対して何の関心を示していないと思っている者が多いという結果であれば、問題である。

尺度4〈厳しいしつけ〉も、心理的侵入と同じく、段階値2、3、4の中庸の値を示すのが、望ましいと考えられ、この値を示すのは、全体で63.1%である。一方、厳しいしつけを受けていると思っている段階値5の者は、7.1%を示し、心理的侵入の段階値5を示した者の半数である。すなわち、厳しいしつけを受けた為に、心理的侵入を受けたと思っている者は半数のみである。逆に甘いしつけを受けている段階値1の者は29.8%と3人に1人弱いる。これも心理的侵入と同じで、親から無視されて何の関心も抱かれていない者が多いという結果であれば、問題である。

尺度5〈両親間不一致〉は、不一致が少ない段階値1が望ましい。この段階値1を示すのは、48.9%で、約2人に1人弱の者が示している。一方、不一致度の高い段階値5を示す者が、22.7%と、5人に1人強いる。

尺度6〈達成要求〉は、この段階値が高いと、親からのプレッシャーがかかりすぎという事で望ましくない。段階値5を示すのは、7.1%である。このパーセント値は、被拒絶感、厳しいしつけなどで段階5を示した値と同じである。一方達成要求が低い段階値1を示したのは、52.5%で、約半数強を占めている。

尺度7〈被受容感〉は、親からどれ程受容されているか見るもので、この段階値が低いのは望ましくなく、被拒絶感とは逆の関係にある。段階値1を示したのは、12.5%で8人に1人の者が、受容されていないと思っている。この値は被拒絶感で段階値5を示した者よりパーセント値は高い。一方段階値4、5の者は67.4%で、3人に2人強の者は、親に良く受容されていると思っている。

尺度8〈情緒的接近〉は、この段階値が高いと、親に情緒的に受容され、親を安全基地と考える事が出来るのであるが、段階値4、5の者は、83%を占め、大部分の者が、親を安全基地と、とらえる事が出来ているという事が明らかになった。一方、段階値1を示したのは、7.1%で、前述したものと同様な傾向で、被拒絶感、厳しいしつけ、達成要求で段階値5を示した者のパーセント値と同じ値である。

〔B〕 対父親… (表2)

尺度1〈被拒絶感〉は、段階値1、2の者が、78.7%で、母親より低い、大部分の者は、自分は父親から拒絶されているとは思っていない。しかし母親より少ないが、4.4%の者が段階値5を示し、父親から拒絶されているという感じを持っている。

尺度2〈積極的回避〉は、段階値1、2の者が56.6%で、半数以上の者は父親に対して回避していないが、段階値5を示す者は22.1%と、対母親の値の2倍以上の高い値を示している。これは青年女子の、対異性の父親への、ある種の拒否感が反映されたものと考えられる。

尺度3〈心理的侵入〉は、段階値2、3、4の中庸の値を示すのが、全体で53%で、

半数以上を示し、母親のそれよりやや高い。一方可成心理的侵入をされていると思っている段階値5の者が16.9%いて、対母親より高い。また段階値1を示す事は、30.1%で対母親より低いが、10人に3人の割合である。総じて心理的侵入は、やや父親の方が母親より侵入していると思っている者が多いという結果である。

尺度4の〈厳しいしつけ〉は段階値2、3、4の中庸値を示すのが、全体で36%で、母親のそれより半減近くになっていて、3人に1人強の値である。一方厳しいしつけを受けていると思っている段階値5の者は、14%で、母親のその2倍の値である。また逆に甘いしつけを受けている段階値1の者は、50%で2人に1人が甘いしつけを受けていると思っていて、母親のそれより、可成高いパーセント値になっている。以上を総じてみれば、父親は母親に比べて、自分の娘に、非常に厳しいか、逆に非常に甘いかで、あまり望ましい適切なしつけを行っていないという事がわかった。

尺度5〈両親間不一致〉は、不一致が少ない段階値1を示すのは、母親とほとんど同じ48.5%で、約2人に1人弱の者である。一方、不一致度の高い段階値5を示すのは、13.2%で、母親のそれより10%弱少なく、対母親、対父親の間にズレが生じている。これは、子どもの養育に関して、父親に対する母親の不満の方が、母親に対する父親の不満より大きいと、子どもが認知している結果と考えられる。

尺度6〈達成要求〉は、プレッシャーがかかりすぎる段階値5を示すのは、11%である。この値は、母親のそれより4%弱高い。これは、厳しいしつけの高い値が出たのと、その背景は同じだと考えられる。ただ母親に見られた、被拒絶感、厳しいしつけ、達成要求、情緒的接近の同じパーセント値は、父親においては認められない。一方達成要求が低い段階値1を示したのは55.9%で、半数強を占め、母親のそれよりやや高い。

尺度7〈被受容感〉は、あまり受容されていないと感じている段階値1を示すのは、12.5%で8人に1人の割合で、これは母親のそれと同じ値である。すなわち母親からも、父親からも8人に1人は、あまり受容されていないと感じている。一方、受容されていると感じている段階値4、5の者は65.4%で、母親よりやや低いが、3人に2人弱の者である。

尺度8〈情緒的接近〉は、親に情緒的に受容され、親を安全基地と考えられる段階値4、5の者が、66.9%を占めている。これは母親のそれより低い値であるが、大体3人に2人の割合である。一方あまり受容されず、親を安全基地と考えられない段階値1の者は、13.2%で、母親のそれより、おおよそ2倍弱の高い値を示している。これらから、青年期の女子は、異性という事もあるが、父親より母親の方を、情緒的に受容されたい対象としているという事が明らかになった。

2. 不和状態が作り出す、親子関係

本研究の目的である、両親の不和状態が、子どもの目からみて、どのような親子関係を築いていたのか、をみる為、前回の研究¹⁾で用いた「人間形成に関わる家庭環境に

ついて」と題したアンケート調査の中の、(1) 環境の内容、(2) 対処の仕方の2つの分野の結果と、FDTの結果の関係を調べた。アンケート調査もFDTも、5段階評定なので、Kruskal Wallisの検定法を用いた。F<.01- ** F<.05- * で示す。また***は項目間が逆な関係で、有意差を示したものである。

(1) 環境の内容×FDT

[A] 対母親…(表3)

環境の内容の第1因子(家族内の対立・不仲)を内容とするQ1、Q4、Q5、Q7、Q8の項目と、FDTの、〈被拒絶感〉〈積極的回避〉〈両親間不一致〉〈達成要求〉〈被受容感〉〈情緒的接近〉の各尺度に、有意差が認められた。すなわち、両親の不和など家族内の対立が多く、不仲な関係が続くと、子どもは「母親は自分の情緒的に受容する事もなく、信頼もせず、拒絶するのみである。そして両親の考えも一致せずお互いの不満が多い。それなら自分も母親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考える様な、親子関係を築いていっているという事である。この様な関係からは、母親が子どもに対して、安全基地の役割をはたす事は、期待できないと考えられる。

次に第2因子(両親が忙しい)を内容とするQ9、Q10の項目とFDTの関係をみると、〈心理的侵入〉〈厳しいしつけ〉〈達成要求〉の各尺度に、有意差が認められた。すなわち、子どもは「母親が忙しいと、自分のプライバシーに侵入してくるし、しつけも厳しい、また父親が忙しくても母親は自分にプレッシャーをかけてくる」と考える様な、親子関係を築いているという事である。両親が忙しく、心にゆとりがないと、子どもにストレスを多くかけている様である。

第3因子(経済的苦労)の項目Q3とFDTの関係では、〈厳しいしつけ〉のみ有意差が認められた。すなわち、経済的苦労が多いと、しつけが厳しくなるという事である。

最後に第4因子(転居)の項目Q2とFDTの関係では〈情緒的接近〉のみ有意差が認められた。すなわち転居が多いと、母親はあまり自分を情緒的に受容していないと考える傾向にあるという事である。

[B] 対父親…(表4)

環境の内容の第1因子(家族内の対立・不仲)を内容とするQ1、Q4、Q5、Q7、Q8の項目と、FDTの〈被拒絶感〉〈積極的回避〉〈心理的侵入〉〈両親間不一致〉〈被受容感〉〈情緒的接近〉の各尺度、有意差が認められた。対母親に見られた〈達成要求〉が見られない代わりに、〈心理的侵入〉が見られるぐらいで、他は同じである。すなわち、両親の不和など家庭内の対立が多く、不仲な関係が続くと、子どもは「父親は自分に心理的侵入はするが、情緒的に受容する事もなく、信頼もせず、拒絶するのみである。そして両親の考えも一致せずお互い不満が多い。それなら自分も父

親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考えられる様な、親子関係を築いていっているという事である。この様な関係からは、母親と同様、父親も子どもに対して、安全基地の役割をはたす事は、期待できないと考えられる。

次に第2因子(両親が忙しい)は、Q9の父親が忙しそうのみが、FDTの〈積極的回避〉尺度と、有意差が認められた。すなわち父親が忙しければ、子どもも父親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしようと考えている事が明らかになった。なお他の因子に関しては、父親に対しては関係が見出せなかった。

(2) 対処の仕方×FDT

〔A〕 対母親…(表5)

対処の仕方の第1因子(内面的思いや感じと巻きぞえ的行動)を内容とする全項目と、FDTの全尺度に、有意差が認められた。特に関係が多くみられたのは、〈被拒絶感〉〈積極的回避〉〈両親間不一致〉〈達成要求〉〈情緒的接近〉などの尺度である。すなわち、両親の不仲な時に、内面的に思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こす子どもは、「母親は自分に対してプレッシャーをかける事は多いが、情緒的に受容する事もなく、拒絶するのみである。そして両親の考えも一致せずお互い不満が多い。それなら自分も母親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考えられる様な、親子関係を築いているという事である。この様な事実から、両親が不仲な時、第1因子(内面的思いや感じと巻きぞえ的行動)に含まれる内容の思い、感じ、行動を起こす子どもは母親に対して、安全基地の役割を期待できない事が明らかになった。

対処の仕方の第2因子(楽観的とらえ)は、〈積極的回避〉〈両親間不一致〉のFDT尺度に、有意差が認められた。すなわち、両親の不仲な時に、楽観的とらえをする子どもは、「両親の考えが一致せずお互い不満であっても、あまり意に介する事もなく、ただそんな母親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考えられる様な、親子関係を築いているという事である。この事から、楽観的にとらえても、母親との接触は避けており、母親に対して安全基地の役割を期待していないという事が明らかになった。

対処の仕方の第3因子(回避行動)は、〈心理的侵入〉〈厳しいしつけ〉〈両親間不一致〉のFDT尺度に、有意差が認められた。すなわち、両親の不仲の時、回避行動をとる子どもは、「両親の考えも一致せずお互い不満が多く、母親はしつけが厳しく、心理的侵入もする」と考えられる様な、親子関係を築いているという事である。これも母親からの関わりを、好ましいものと受けとっておらず、母親に対して安全基地の役割を、期待していないという事が明らかになった。

〔B〕 対父親…(表6)

父親への対処の仕方をFDTとの関係は、対母親と比較して、有意差を示したもの

は、非常に少ない。すなわち、不仲な時の対処の仕方が、その後の父親の関係に、母親ほど影響していないという事が出来る。関係がみられるのは、第1因子（内面的思いや感じと巻きぞえ的行動）のみで、〈被拒絶感〉〈積極的回避〉〈心理的侵入〉〈両親間不一致〉〈情緒的接近〉に、有意差が認められた。すなわち、両親の不仲な時に、内面的に思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こす子どもは、「両親は考えも一致せずお互い不満が多い。そして父親は自分への心理的侵入は多いけれど、情緒的に受容する事もなく、拒絶するのみである。それゆえ自分も父親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考えられる様な、親子関係を築いているという事である。この様な事実から、両親が不仲な時、第1因子（内面的思いや感じと巻きぞえ的行動）に含まれる思い、感じ、行動を起こす子どもは、父親に対して、安全基地の役割は期待できないでいる事が明らかになった。

以上第1因子とFDTの尺度は、有意差が認められたが、第2因子（楽観的とらえ）、第3因子（回避行動）には、有意差が全然認められなかった。すなわち両親の不仲の時、楽観的とらえや回避行動を起こした子どもは、親子関係を築く上で、それ程影響を受けていないという事である。心にあまり沁み込まない対処の仕方は、親子関係に影響しないという事が言える。ただこれは父親に対してのみであり、母親との違いが明らかになった。

なお、これは本題と少し離れるので、今回は参考として述べるに留めるが、前回の研究¹⁾で用いた、「人間形成に関わる家庭環境について」の、アダプティション分野で、特に対人関係に問題を持っている者が、どういう親子関係をつくってきたのかを見てみた。アダプティション分野のQ28、Q33、Q34の各項目とFDTとの関係である。その結果、母親に対しては、〈被拒絶感〉〈厳しいしつけ〉〈両親間不一致〉、父親に対しては〈心理的侵入〉の各尺度で、有意差が認められた。対人関係で問題を持っている者は、母親に対して、「両親は考えも一致せずお互い不満が多く、しつけも厳しく、拒絶するのみ」と考えられるような、親子関係を築いていると思われる。また父親に対しては、「自分への心理的侵入が多い」と考えられる様な、親子関係を築いているようだ。

IV. まとめ

不和状態の親に対して、子どもの目から見て、どの様な親子関係を築いていたのかを明らかにしようとした。その為某女子大学生141名を対象に、家庭環境全体を問うた「環境の内容」、両親の争いの時の子どもの対し方を問うた「対処の仕方」の26項目からなるアンケート調査を、また親子関係を調べる為のFDT（対母親、対父親の両方）を実施した。その結果、以下の様な事が明らかになった。

1. 両親の不和など家庭内の対立が多く、不仲な関係が続くと、母親に対して子どもは「自分を情緒的に受容する事もなく、信頼もせず、拒絶するのみである。そし

て両親の考えも一致せずお互い不満が多い。それなら自分も母親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考える様な、親子関係を築いている。

2. 両親の不和など家庭内の対立が多く、不仲な関係が続くと、父親に対しても子どもは、「自分に心理的侵入はするが、情緒的に受容する事もなく、信頼もせず、拒絶するのみである。そして両親の考えも一致せずお互い不満が多い。それなら自分も父親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考える様な、親子関係を築いている。
3. 両親の不和な時の対処の仕方、内面的に思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こす子どもは、母親に対して「自分にプレッシャーをかける事は多いが、情緒的に受容する事もなく、拒絶するのみである。そして両親の考えも一致せずお互い不満が多い。それなら自分も母親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考える様な親子関係を築いている。
4. 両親の不和な時の対処の仕方、父親に対しては、対母親に比べて、特徴ある親子関係をあまり築いていない。ただ対処の仕方、内面的思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こした子どものみ、「両親は考えも一致せずお互い不満が多い。そして父親は自分への心理的侵入は多いけど、情緒的に受容する事もなく、拒絶するのみである。それゆえ自分も父親との接触を避け、関わりをできるだけ持たないようにしよう」と考えられる様な、少し傾向を持った親子関係を築いている。
5. 以上の事から、両親の不和な時、対処の仕方が、内面的思い、また感じ、巻きぞえ的行動を起こす子どもは、親に対して、安全基地の役割を期待するような、親子関係を築けていない事が明らかになった。しかも父親より母親に対して、この特徴が明確に示された。
6. その他、まず環境の内容の結果から言える事は、対母親で両親が忙しいと、〈心理的侵入〉〈厳しいしつけ〉〈達成要求〉の各尺度に特徴ある親子関係が形成された。経済的苦労と〈厳しいしつけ〉、転居と〈情緒的接近〉に関係がみられ、対父親では、両親が忙しいと〈積極的回避〉に関係がみられた。また対処の仕方の結果から言える事は、対母親で、楽観的なとらえと〈積極的回避〉〈両親間不一致〉の関係が、回避的行動と〈心理的侵入〉〈厳しいしつけ〉〈両親間不一致〉に関係がみられた。

10

文献

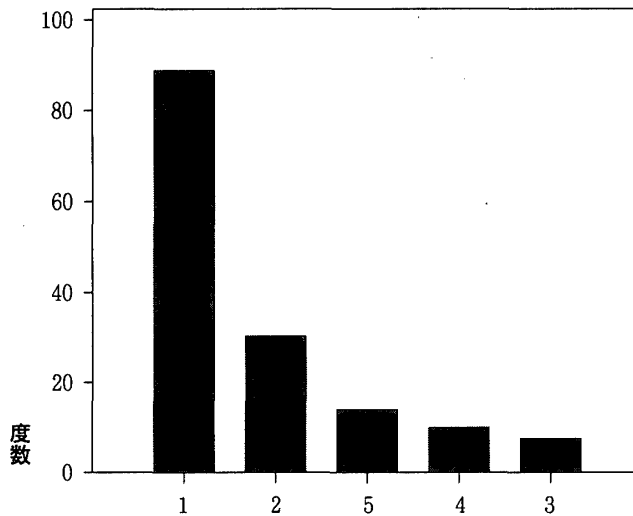
- 1) 萩原英敏「両親の不和がこの心理的発達に及ぼす影響—青年女子の場合—その1. 不和の介入度と心理的危機との関係を中心に」『淑徳短期大学研究紀要』第43号, 2004年, p.55-83.
- 2) 東洋〔ほか〕「Family Diagnostic Test —親子関係診断検査—」日本文化科学社, 2002.

- 3) Symonds, P. M. "Some basic concepts in parent-child relationships" American J. of Psychology Vol.50, 1937, p.195-206.
- 4) Schaefer, E.S., Bell, R. Q. "Development of parental attitude research instrument" Child Development Vol.29, 1958, p.339-361.

表1 FDTの尺度別段階値 対母親

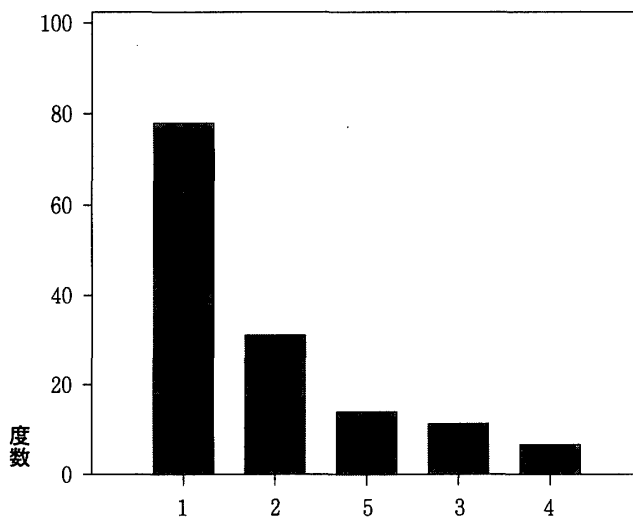
尺度1 〈被拒絶感〉

段階値	度数	パーセント
1	86	61.0
2	30	21.3
5	10	7.1
4	8	5.7
3	7	5.0
合計	141	100.0



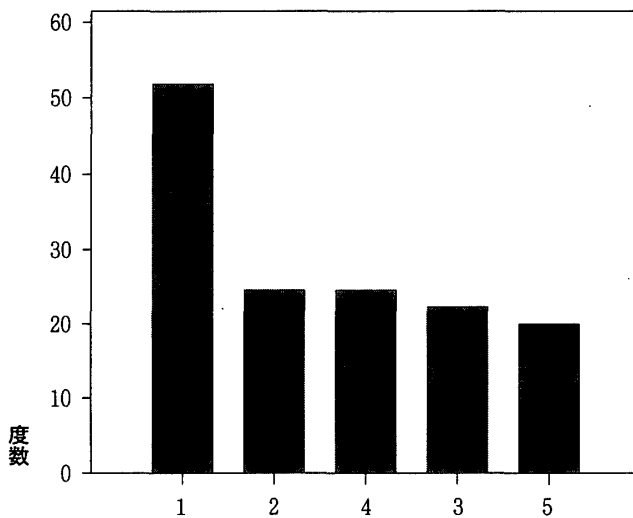
尺度2 〈積極的回避〉

段階値	度数	パーセント
1	78	55.3
2	31	22.0
5	15	10.6
3	11	7.8
4	6	4.3
合計	141	100.0



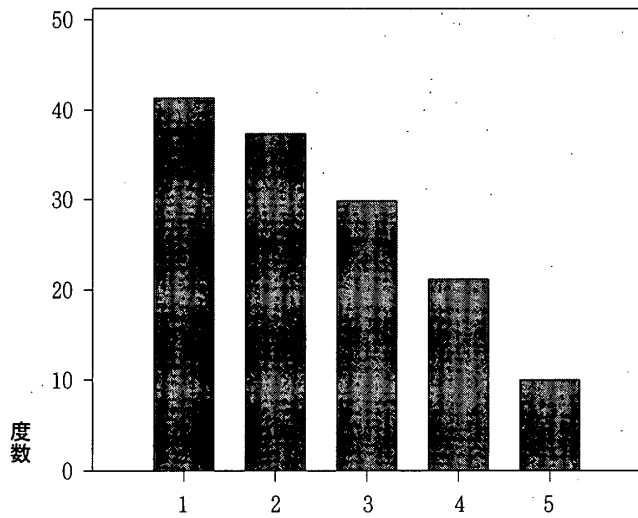
尺度3 〈心理的侵入〉

段階値	度数	パーセント
1	51	36.2
2	24	17.0
4	24	17.0
3	22	15.6
5	20	14.2
合計	141	100.0



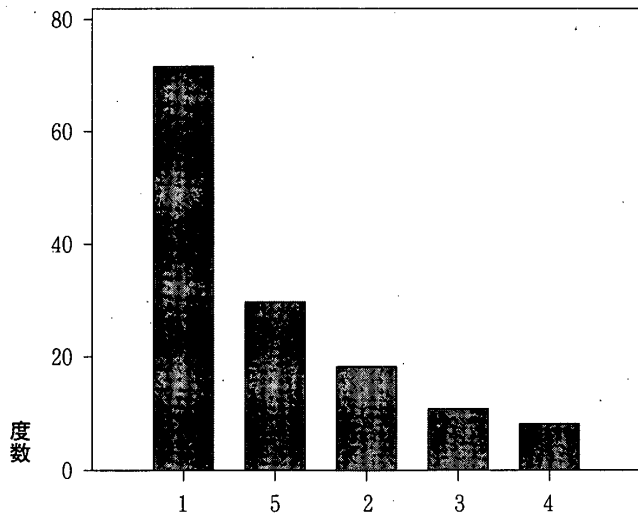
尺度4 <厳しいしつけ>

段階値	度数	パーセント
1	42	29.8
2	37	26.2
3	30	21.3
4	22	15.6
5	10	7.1
合計	141	100.0



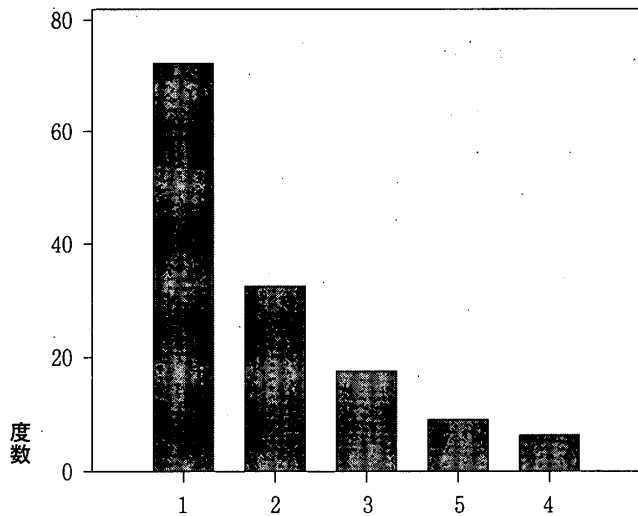
尺度5 <両親間不一致>

段階値	度数	パーセント
1	69	48.9
5	32	22.7
2	19	13.5
3	13	9.2
4	8	5.7
合計	141	100.0



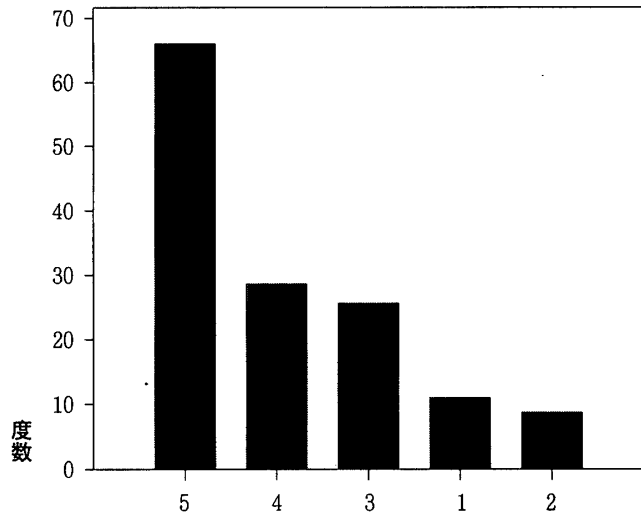
尺度6 <達成要求>

段階値	度数	パーセント
1	74	52.5
2	32	22.7
3	18	12.8
5	10	7.1
4	7	5.0
合計	141	100.0



尺度7 〈被受容感〉

段階値	度数	パーセント
5	66	46.8
4	29	20.6
3	27	19.1
1	11	7.8
2	8	5.7
合計	141	100.0



尺度8 〈情緒的接近〉

段階値	度数	パーセント
5	97	68.8
4	20	14.2
1	10	7.1
2	8	5.7
3	6	4.3
合計	141	100.0

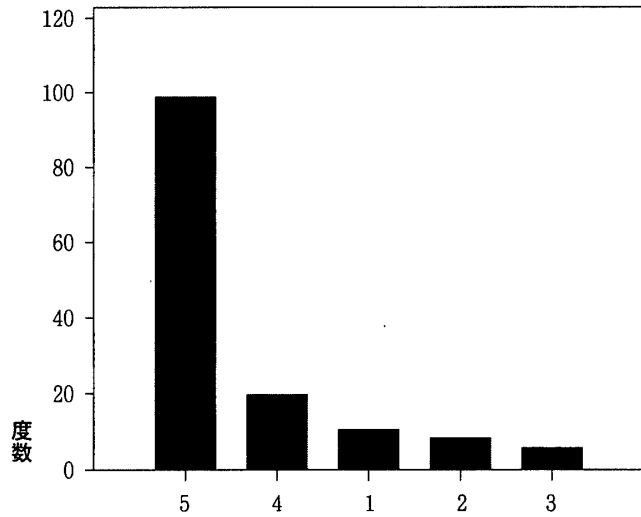
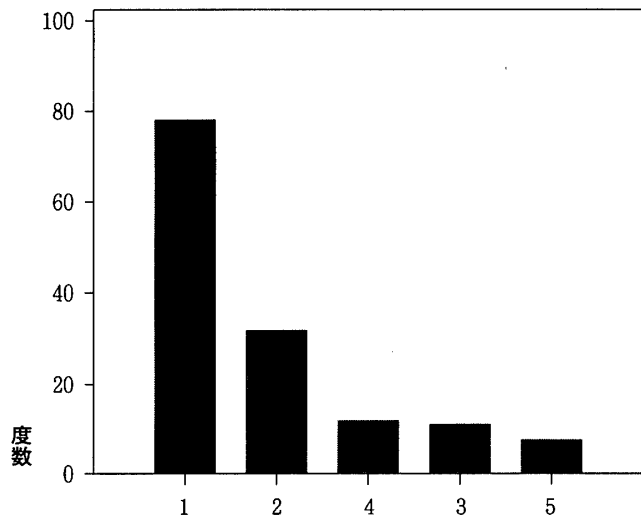


表2 FDTの尺度別段階値 対父親

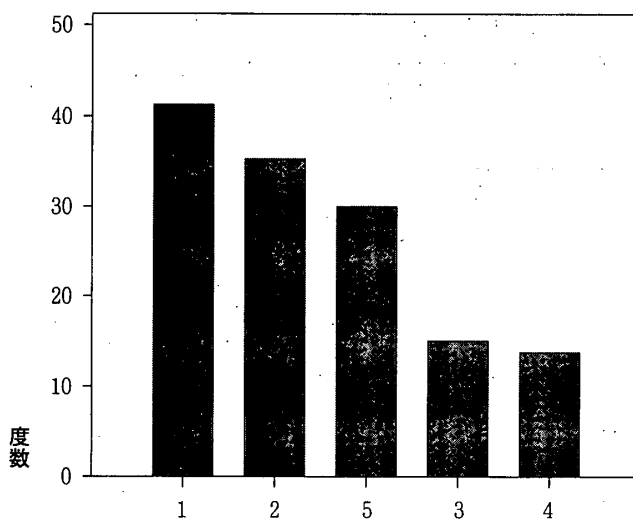
尺度1 〈被拒絶感〉

段階値	度数	パーセント
1	78	57.4
2	29	21.3
4	12	8.8
3	11	8.1
5	6	4.4
合計	136	100.0



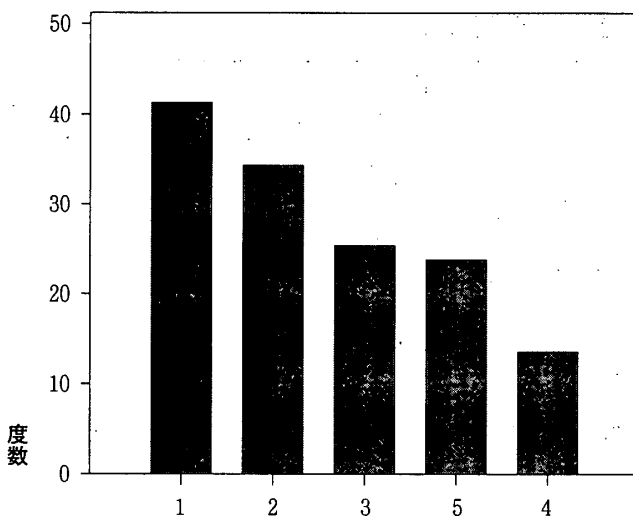
尺度2 〈積極的回避〉

段階値	度数	パーセント
1	41	30.1
2	36	26.5
5	30	22.1
3	15	11.0
4	14	10.3
合計	136	100.0



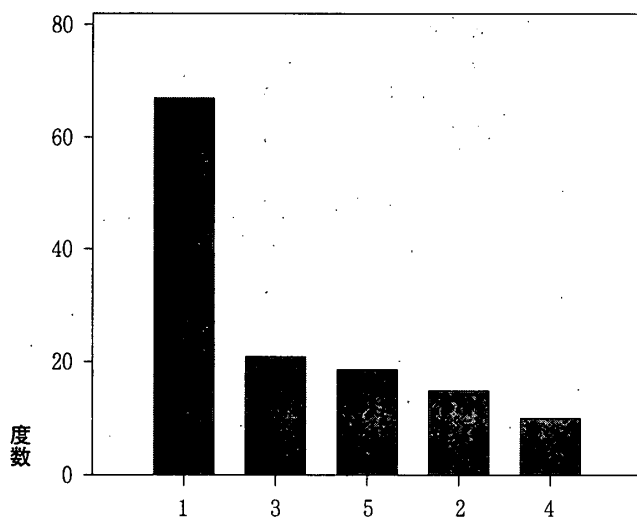
尺度3 〈心理的侵入〉

段階値	度数	パーセント
1	41	30.1
2	34	25.0
3	25	18.4
5	23	16.9
4	13	9.6
合計	136	100.0



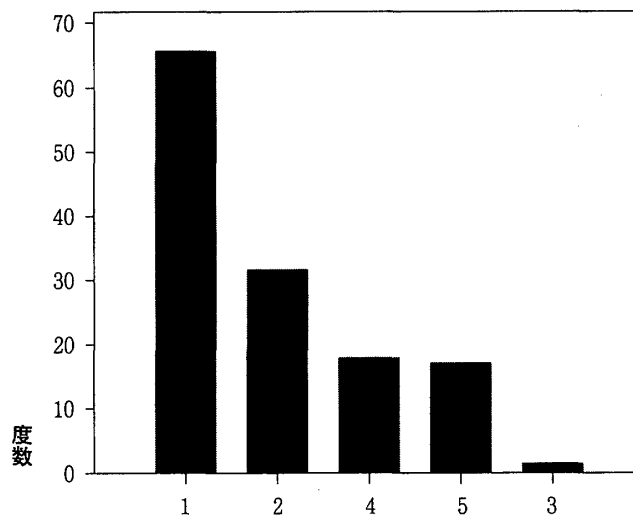
尺度4 〈厳しいしつけ〉

段階値	度数	パーセント
1	68	50.0
3	21	15.4
5	19	14.0
2	16	11.8
4	12	8.8
合計	136	100.0



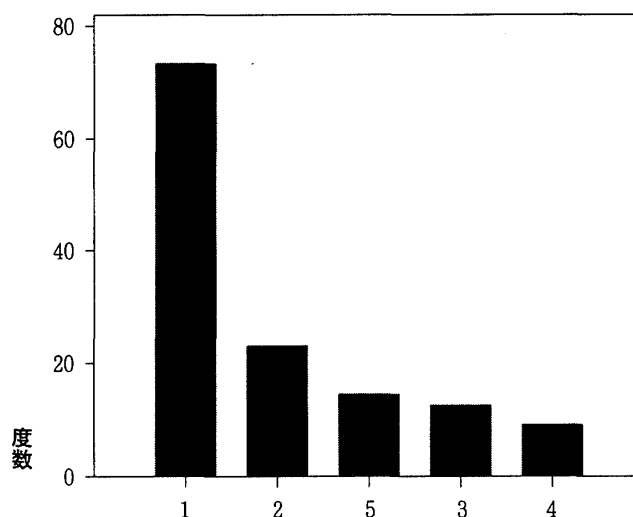
尺度5 〈両親不一致〉

段階値	度数	パーセント
1	66	48.5
2	32	23.5
4	19	14.0
5	18	13.2
3	1	0.7
合計	136	100.0



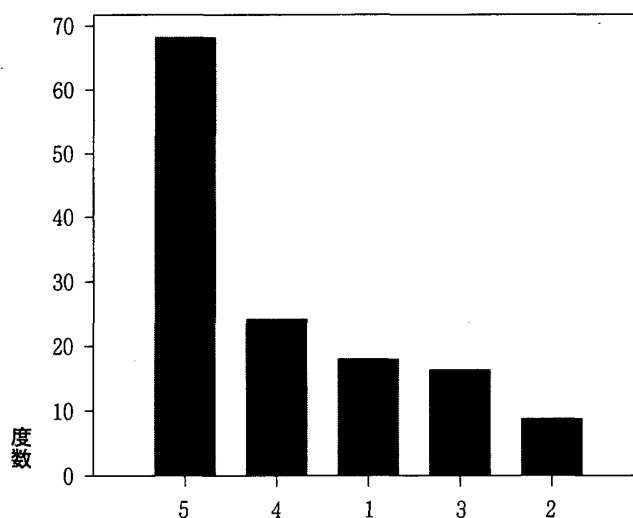
尺度6 〈達成要求〉

段階値	度数	パーセント
1	76	55.9
2	23	16.9
5	15	11.0
3	13	9.6
4	9	6.6
合計	136	100.0



尺度7 〈被受容感〉

段階値	度数	パーセント
5	60	44.1
4	29	21.3
1	17	12.5
3	16	11.8
2	14	10.3
合計	136	100.0



尺度 8 〈情緒的接近〉

段階値	度数	パーセント
5	68	50.0
4	23	16.9
2	19	14.0
1	18	13.2
3	8	5.9
合計	136	100.0

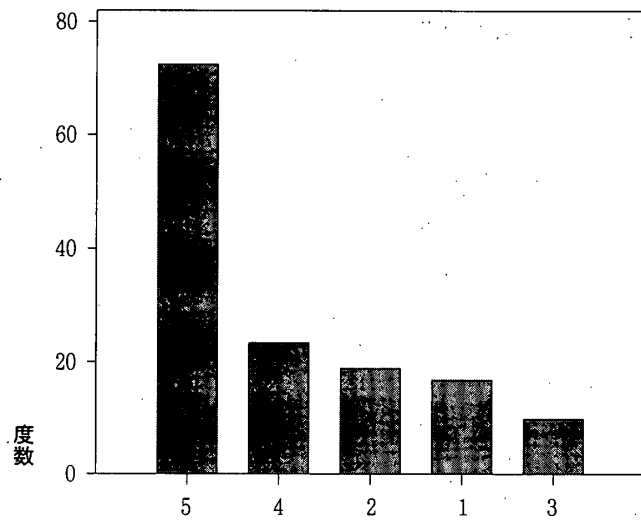


表3 環境の内容×FDT 対母親

環境の内容	因子	説明	Q	FDT (対母親)							
				被拒絶	拒感	積極的回避	心理的侵入	厳しいしつけ	両親間不一致	達成要求	被受感
環境の内容	第1因子	家族内の対立・不仲	Q 1		**			**			—*
			Q 4	**	**			**			
			Q 5	**	**			**		—*	—**
			Q 6								
			Q 7						*		
			Q 8	**	**					—**	—**
	第2因子	忙しい両親が	Q 9						*		
			Q 10				*	*			
	因子第3	苦勞	経済的	Q 3					**		
	因子第4	転居		Q 2							—*

表4 環境の内容×FDT 対父親

環境の内容	因子	説明	Q	FDT (対父親)								
				被拒絶	拒感	積極的回避	心理的侵入	厳しいしつけ	両親間不一致	達成要求	被受感	情緒的接近
環境の内容	第1因子	家族内の対立・不仲	Q 1	*					*		—**	
			Q 4	**	**				**		—*	—*
			Q 5	*	*				**			—*
			Q 6									
			Q 7				**		**			
			Q 8	**	**				**		—*	—*
	第2因子	忙しい両親が	Q 9			**						
			Q 10									
	因子第3	苦勞	経済的	Q 3								
	因子第4	転居		Q 2								

表5 対処の仕方×FDT 対母親

			FDT (対母親)								
			被拒絶	拒感	積極的回避	心理的侵入	厳しいしつけ	両親間不一致	達成要求	被受容	情緒的接近
対処の仕方	第1因子	内面的思いや感じと巻きごえ的行動	Q11		**			**	*		
			Q12			**	**	**			
			Q13	**		*		*			
			Q15	**				**	*	*	
			Q16	**				*	*		
			Q17	**				**			**
			Q18	*				**	*		*
			Q19		*						
			Q20				**				*
			Q21	*	*			*			
			Q22		**			*	*		
	Q23		**	*					**		
	因子第2	とらえ 楽観的	Q14					*			
Q24				*							
因子第3	行動 回避	Q25									
		Q26			*	*	*				

表6 対処の仕方×FDT 対父親

			FDT (対母親)								
			被拒絶	拒感	積極的回避	心理的侵入	厳しいしつけ	両親間不一致	達成要求	被受容	情緒的接近
対処の仕方	第1因子	内面的思いや感じと巻きごえ的行動	Q11		*	*					
			Q12								*
			Q13								
			Q15					*	**		*
			Q16						*		
			Q17						**		
			Q18								
			Q19								
			Q20								
			Q21								
			Q22	*							*
	Q23										
	因子第2	とらえ 楽観的	Q14								
Q24											
因子第3	行動 回避	Q25									
		Q26									

(資料2)

FDTの尺度別質問項目の例と、評価法

- Q. 母(父)は、わたしのことを「こんな子でなかったらよかったのに」と、思っているようだ〈被拒絶感〉
- Q. 母(父)と、できるだけ顔を合わせないようにしている〈積極的回避〉
- Q. 母(父)は、わたしが家の外で何をしているのかと、とても知りたがる〈心理的侵入〉
- Q. 母(父)は、私が何か悪いことをすると厳しくしかる〈厳しいしつけ〉
- Q. わたしのことについて、両親の意見はあまり一致していない〈両親間不一致〉
- Q. 母(父)は、わたしが将来、みんなから尊敬されるような職業について欲しいと思っている〈達成要求〉
- Q. 母(父)は、わたしの幸福を心から願っている。〈被受容感〉
- Q. 母(父)のそばにいてだけで、暖かい気持ちになる〈情緒的接近〉

- まったくあてなまらない……1点
あまりあてはまらない……2点
どちらともいえない……3点
だいたいあてはまる……4点
よくあてはまる……5点